

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成20年9月30日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 鈴木 聡

事業区分	平成20年度・国際研究集会派遣助成		
研究集会名	第26回イタチ科会議		
発表題目	Geographic variation of cranial morphology of the Japanese weasel <i>Mustela itatsi</i> (ニホンイタチ <i>Mustela itatsi</i> の頭骨形態の地理的変異)		
開催場所	ハンガリー共和国・ブダペスト		
渡航期間	平成20年8月17日 ~ 平成20年9月3日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円	
	使用した助成金額	200,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空券代金 166,000円	
		税(航空保険料・燃料サーチャージ等) 4,5240円	

成果の概要 / 鈴木 聡

2008年8月17日から9月2日までの17日間、第26回イタチ科会議(26th Mustelid Colloquium)に参加するため貴財団の助成を受けてハンガリー共和国に渡航した。

会議は8月28日から8月31日までの4日間開催された。この会議は毎年ヨーロッパで開催されている小規模な会議で、今回の参加者は51人で私以外はヨーロッパ17ヶ国からの参加だった。

学会初日は午後7時からハンガリー自然史博物館で歓迎レセプションと博物館の展示「食肉目の世界」のガイドツアーが行われた。博物館に展示されている食肉目の標本は世界各地のもので、博物館が長い歴史の中で熱心にコレクションを収集してきたことが伺えた。

口頭発表とポスター発表は29日と30日の2日間で行われ、口頭発表は26件、ポスター発表が24件だった。私はニホンイタチの頭骨形態の地理的変異に関するポスター発表を行った。ポスターセッションのコアタイムは29日の口頭発表終了後1時間で、その時間帯に私はポスターの前で参加者に研究内容を説明した。この1時間の間に数人と有意義な議論と情報交換が出来た。口頭発表の間には何度か20分のコーヒープレイクの時間があり、ポスターについて議論する良い機会であった。またこの時間を口頭発表についての発表者への個人的な質問や議論に活用した。

29日の口頭発表はSim Broekhuizenによる「イタチ科会議の歴史(1982-2008)」('The history of the Mustelid Colloquium (1982-2008)')で始まった。この会議は1982年にドイツで「テン会議」(Marder Kolloquium)として始まり、次第に研究対象種と規模を拡大していった27年の歴史を持つ国際会議である。この歴史の中でアジア人が参加したのはおそらく今回が初めてだと思われる。今回私がヨーロッパ中心の国際会議に出席したのは、長年にわたりイタチ科に関する多くの研究が行われているヨーロッパの現状に興味があったことに加え、私の興味の対象が東アジアのみならずヨーロッパを含めた他の地域に生息するイタチ類にまで及ぶためである。

この発表の後に、方法論、分子レベルのアプローチ、形態学・生理学・生物地理学に関する口頭発表が行われた。30日は、行動・生態と保全生物学に関する口頭発表が行われた。口頭発表の半分が行動・生態と保全に関する研究で占められていたのは印象的だった。この会議では基礎的な行動学・生態学的側面に興味関心が集中していて、それを基礎とした保全生物学的研究への関心も高いことがうかがえる。イタチ科を研究対象とする研究者が少なく、保全どころか基礎的な研究も少ない日本を含めた東アジアの現

状とは対照的である。研究対象種は、広域分布するムナジロテン *Martes foina* , ユーラシアカワウソ *Lutra lutra* , ヨーロッパミンク *Mustela lutreola* に関するものが多かった。ムナジロテンは会議の開催地ブダペストをはじめ多くのヨーロッパの都市に棲みついている。ハビタット選択や人畜共通感染症の観点からの発表があり、興味深かった。特に人畜共通感染症に関しては社会的重要性が大きい。ユーラシアカワウソとヨーロッパミンクに関しては、保全関連の発表が多かった。これらの研究は、東アジアにおいて絶滅が危惧されるイタチ科動物の保全のために重要なケーススタディであると考えられる。私にとって印象深かった発表はルーマニアの Hegyeli Zsolt のトランシルバニア地方におけるイタチ科 8 種の 1964 年から 1995 年までの 32 年間の狩猟個体の体重の変遷に関するものだった。狩猟で捕獲された個体は標本化されトランシルバニアの博物館に保存されている。このような研究には長年のデータの蓄積が必要である。会議期間の前後に私はハンガリー自然史博物館で標本調査を行ったのだが、標本収蔵庫にはたくさんのイタチ科の頭骨および毛皮標本が保存されていた。膨大なコレクションがこのような研究を可能にする。残念ながらこれだけたくさんのイタチ科の標本が保存されている博物館が日本にはない。

29 日の夕食後には座談会が行われ、テーマとしてカワウソの保全、イタチ科動物に対する道路の影響、非侵襲的研究手法が挙げられ、それらの事項について各国の現状が紹介された。この中でも道路の影響についての話題が多く、交通事故死した動物個体(ロードキル)を減らす対策やロードキルの積極的な利用についての話が多かった。ロードキル対策や保全に関して今後は研究者と政府の協力が必要だという提言がなされた。このように社会的課題と積極的に向き合う姿勢が見られた。

エクスカーシオンは最終日の 31 日に行われ、半日のプログラムのブダペスト動物園のガイドツアーと、1 日間のプログラムのブダペストの北にあるピリシュ自然保護区を訪れるツアーのどちらかに参加できた。私はブダペスト動物園のガイドツアーに参加した。ブダペスト動物園は 1866 年に設立された歴史のある動物園で、哺乳類を含め世界中の多くの動物が飼育されていた。

ヨーロッパの研究者と議論や情報交換を行うことで交流を深めることができ、日本のイタチ科研究の課題について考えるよい機会であった。今後、日本のイタチ科研究を発展させるためには、まず系統分類学や生態学の基礎的研究を充実させる必要がある。また、博物館等が標本を積極的に収集し、それを研究者が積極的に利用する環境を整備する必要がある。今回の成果に関しては、日本哺乳類学会の和文誌「哺乳類科学」で紹介する予定である。